

シティⅢ

カゲヤマ气象台

作品概要

『シティⅢ』は2015年より継続して上演された『シティ』三部作の最終章として書かれた作品ですが、前二作と直接的なつながりはなく、独立した作品でもあります。

舞台は文明が一度荒廃し、再興したはるか未来です。今作は「希望」をモチーフに執筆されましたが、希望を持てるなら想像もつかないほど遠い、私たちが何度も何度も死んだ未来でないといけませんでした。気の遠くなるような距離でからでない希望は考えることはできない。それは絶望的なことでもあります、しかしそれが実感でした。

未来について考えたとき、それは物語のことでもありました。物語というのは、ただフィクションというだけでなく、先行した想像力があり（まったくの無からは物語は生まれず、「すでに知っている何か」と反応して物語は認識されます）、言葉の上を漂いながら他者に届きます。物語は未来があるからこそ機能し、常にそのベクトルは未来の方を向いているのではないか。未来が存在しないなら、物語は必要とされないのではないか。なぜなら、それは生きていくための知恵であり、常に「これからどうしていくか」という問いかけを孕んでいるからです。また、別の言い方をすれば、物語について私達が「すでに知っていること」というのは、もしかしたら未来からやってきている。それは経験でも教わったことでもなく、なぜか「すでに知っている」からです。私達が生まれたときからすでに死ぬことを知っているように、ある種の物語というのは「すでに知っている」ものとして未来からきている。こちらから未来に向かっていく要素も、未来からこちらに向かってくる要素も、同時に物語の中にはある。

未来と希望と物語と絶望が同時にひとつであることができるのは演劇ではないかと思います。それは特殊なことではなく、演劇は当たり前にならぬのではないか。そういう意味でも、至極普通の劇を書こうと試みました。

『シティ川』

文明が一度滅び、再興した未来。荒野のはずれの小さな町。

人物

- ・まいと……泥棒
- ・しるびお……旅芸人
- ・けーな……旅芸人
- ・さいとう……爆弾屋
- ・るうしー……占い師
- ・老人A

D C B

舞台正面奥には何かの台座のような装置が置かれている。

【5,670,000,000年後の世界】

さいとう登場。

さいとう あっ不吉だ。不吉だ。不吉だ……。不吉だ……。不吉だ……。でも俺、俺髪切ったばっかだし。うん、あつよくない、よくないな……。晴れるかな、しばらく。しばらく晴れるかな。もっずい分、ここずい分雨だったし、なんか、べとべとするな、べとべと。うん、不吉だ……。(しばらく空を眺めて) ああ、鳥、鳥、鳥、鳥食いたいな、鳥。鳥食ってないな、最近。うまいのかな、最近の鳥は。でも、食ったら、食ったら死んじゃうもんな、鳥は。食ったら死んじゃう。死んでる？ 死んでるってことは……。あ、死んでるってことは、オバケじゃん。オバケだよ。怖えな、オバケだよ。オバケだよ、鳥肉って。そうか、オバケってことは、だから鳥も、だから、あっちの方から飛んでくるんだな。やっぱり。あっ不吉、不吉だ……。

るうしー登場。

るうしー 地獄に墮ちる！

さいとう うるせえバカ！

るうしー 地獄に墮ちる！

さいとう うるせえ、バカ！(去る)

るうしー 私の神様。とても大事です(占いの道具を取り出す。それは観客からはゲームボーイのように見える)。ありがとうございます。ご飯をおいしく、いただいております……。さあ、(占いの道具を耳にあてる)

……え？ ……そうですか……。はい、はい………そうですか……。ありがとうございました(古い道具をしま
う)。「今日はアクティブな一日にしましょう。」「今日はアクティブな一日にしましょう。」「……ありがとうご
ざいます……。」「ラッキーフィッシュは鯨。」「そうですか……。でも、何か大事なことを隠されているような気が
する。なんか嫌な予感がする。こんなに雲が速く流れるなんて。まるであっちの方向から逃げようとしているみた
い。アクティブって何だよ。走ればいいのかよ。走れば満足なのかよ。(走って去る)

まいと登場。

まいと (満身創痍で) ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……
ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウウ……ウ
ウ……ウウ……ウウ……ウウ……(野菜を取り出し、ため息をつく) しくてやがる…… (野菜を食べる) ……はら
へったな、どこかに、金持ちでも死んでねえかな。はらがへったよ。あつたかいものが食べたいよ。あつたかい野
菜、あつたかい肉、あつたかい骨、あつたかい虫、なんだっていいよ。どうもこの町は、しくてやがんな。景気も
悪そうだな。年寄りばっかだしな。とっととずらかりたいよこんな所。でもはらがへってんだよなあ。いいかげん
疲れたしなあ。疲れたよ。ほんとだよ、ほんとよに疲れた。(去る)

【街頭劇】

しるびお、けーな登場。

沈黙劇。

(人間の姿容。正体不明の生物の誕生。古いコメディのように、戯画化された陽気さ。)

けーな (劇の途中で独白) 私たちは劇をしてお金をもらっている。だいたいみんな満足してくれる。本当にこれ
でいいのだろうか。私は劇なんてみたことがない。市場で投げ売られてたこの本を読んだだけ(演劇の本を取り出
す)。やってみたらお金になった。果たして一生これをやり続けるんだろうか。

ダンス！

しるびお、けーな、踊りながら退場。拍手と歓声。

【疑い】

るうしー登場。疲れている。

るうしー ちょっとアクティブすぎたんじゃないかしら。なにしろ、鯨なんて(鯨を取り出す)なかなかいなかっ
たし……。これいったいどうすればいいんだろう……。食べるの？ 何で？ ポン酢？ (一口食べる) まず
い……(鯨をしまう)。家でゴボウに塩かけて食べよう。この丘からはちょうど私の家が見えるんだ。あの、酒れ
た泉の近くに。茶色い屋根の。小さな二ワトリ小屋つきの。あれ。ない。ない！ ない！ ない！ 私の家がな
い！ えっ？ ない？ ない！ ない！ なんてないの！ なんてないの！ なんて私の家。えっ？

なんで？ なんてないの？

まいと登場。手に不気味な人形を持っている。

るうしー ちょっとあんた私の家ないんだけど！

まいと 知らないよ。

るうしー 知らないじゃないよ！

まいと 知らないんだよ。

るうしー あそこの家だよ！

まいと ああ、爆発したよ。

るうしー 爆発。

まいと 爆発したよ。一人死んだよ？

るうしー いつ？

まいと さっきだよ。

るうしー 悲しい。

まいと (肩を叩いて) まあ、元気だしなよ。

るうしー 触んな。

まいと じゃあな。(去る)

るうしー もう駄目だ……。長年かけて集めてきた、いろんなパワーグッズも失われてしまった。(ゲームボーイを思わせる、占いの道具を取り出す) 私にはもう、あなたさまだけが頼りです。私はこれから一体どうしたらいいんでしょう？ ……駄目だ、何も聞こえない。……あいつだ……あいつのせいだ……あいつのせいに違いはない。なんでいつもあいつは。なんで私はいつもあいつに苦しめられるのか？ あー悲しい。あー悲しい。あー。あー。あーお腹が空いた。お腹が空いたよ。つらい。お腹が空いたよ。なんでこんな時間まで、なんでこんな時間まで私、なにも食べてないんだろう。なにか食べなきゃ。なにか食べないとやっていけない！ (去りかける) ……ん？もしかして、いつも通りだったら私……。もしかして私、いつもだったら、……家にいたんじゃないの？ 家にいたんじゃないの？ いつもだったら私。いつもだったら、私、家にいたんじゃないの？ いたんじゃないの、いつもだったら？ あぶねえ！ あぶねえ！ あぶねえよ！ まじか！ まじラッキーか！ はっ！ 鯰……。もし私が、鯰を探してなかったら……。もし、鯰じゃなくて、もつと見つけやすい、なんだろう、どじょうとかそついうのだったら……。私、鯰のおかげで……。ラッキーフィッシュ？ ラッキーフィッシュ……。 (鯰を取り出す) (あれ、ない。ない……。ない？) (占いの道具を取り出す) ありがとうございます。ありがとうございます。……。 (占いの道具をしまう) まずはご飯、それから復讐だ。(去る)

さいとう登場。

さいとう イメージなんだよ大事なのは。純粋なイメージが大事。喜ばしいとか、痛々しいとか。俺だって、何度も死にかけた。死にかけたさ。でも、純粋だから。大事なんだよ。本当に、うん……。実験的な精神がね、常に求められるんだよ。冒険心と、あと経験を信じること。でも先入観は捨てる。そうしないと駄目なんだよ。いい爆発と、悪い爆発がある。いい爆発はきれいだ。後腐れがないんだよ。悪い爆発っていうのはね、気持ち悪い。哲学がない。肉だからうまいとか、頑張ったから偉いとか、そうかもしれないけどさ、でもそれじゃ駄目なんだよ。低俗なんだよ。派手だからいいとかさ、そういうのじゃないんだよ、爆発っていうのはさ……。慎ましやかで、さっぱりしていて、でも芯があって、水なすみたいに。水なすはいいよ。俺は水なすみたいな爆弾をね、水なすみたいな爆弾を作りたいんだ。水なすをね。こう、水なすなんだよ……。

るうしー登場。手に死んだフラミンゴを持っている。

るうしー この野郎！

さいとう 何をする！

るうしー (死んだフラミンゴで頭を殴って) この野郎！ この野郎！

さいとう やめてくれ！

るうしー (死んだフラミンゴで頭を殴って) この野郎！

さいとう やめてくれ……。

るうしー (死んだフラミンゴで頭を殴ろうとして) この……

さいとう やめてくれ……。やめてくれ……。やめてくれ……。やめてくれ……。やめてくれ……。

るうしー あんただろ。

さいとう 何だよ。

るうしー 私が何をしたらっていうんだよ。

さいとう 俺が何をしたっていうんだよ。

るうじー とぼけるんじゃないよ。

さいとう 俺が何をしたっていうんだよ。

るうじー 私が何をしたっていうんだよ。

さいとう 知らないよ。

るうじー 知らないじゃないよ。

さいとう 何のことだよ。

るうじー あんただろ。

さいとう 何がだよ。

るうじー あんただろ私の家を。

さいとう 家って何だよ。

るうじー 家だよ！

さいとう 俺じゃないよ、俺はあんな、俺はあんな低俗なね、低俗な爆発は、嫌いなんだよ。

るうじー 嫌いとか言うなよ。

さいとう 嫌いなんだよ、しょうがないんだよ。あのね、疑うんだったらね、(バインダーを持ってくる)これが俺のポートフォリオなんだけど、俺の爆弾はね、こう、こういうふうになるんだよ。ほら、な？ あんなね、あんなふうにはならない。俺ちゃんとほら、プロだから。プロはね、あんな仕事はしない。

るうじー わざとかもしれないじゃないか。

さいとう そんなことしないよ。

るうじー 嘘言ってもわかるんだよ(死んだフラミンゴを脇に置き、ゲームボーイのような占いの道具を取り出して、ぶつぶつとつぶやく)。

間。

るうじー (額き、占いの道具をしまい、再び死んだフラミンゴを手持って) 本当みたいだね。

さいとう 本当だよ。

るうじー でもあんたは嫌いだよ。

さいとう 嫌いじゃないよ。

るうじー 怒りのぶつげようがなくなつてつらい。

さいとう あ、そう。

るうしー 失われた一五年間。

さいとう (不気味な人形を取り出す) これならやるよ。

るうしー ココラリカボタストプレマン！

さいとう え？

るうしー ココラリカボタストプレマンじゃないの！

さいとう 道端で売りつけられたんだよ。怖かったから買っちゃったんだよ。でももういらなからあげるよ。

るうしー あげるって私のだよ！

さいとう よかったね。

るうしー ああよかった。本当によかった。(ココラリカボタストプレマンを大事にしまう) 誰かが私の家からココラリカボタストプレマンを盗んだんだ。きっとそれでクロトロンボカンベズスカットプゲゲバラカスのバランスが崩れたんだ……。

さいとう なんだよクロトロンボカンベズスカットプゲゲバラカスって。

るうしー クロトロンボカンベズスカットプゲゲバラカスはパワーはすごいんだけど超不安定で、だからココラリカボタストプレマンをその坤(ひつじさる)の方向に置くことで安定させていたんだけど……。誰から買ったの。

さいとう こんな感じのやつだよ。

まいと登場。

さいとう、るうしー去る。

まいと ウン……(鯨を取り出して、一口食べる)……まずい……。鯨をしまう)。俺は、ただ腹が減ってるだけの、つまらない人間だな。俺、どっから来たんだい。なんか、ぼんやりしてるんだよな。風邪、ひいたことないんだけどな。あんた、どっから来たんだい？(無言で後ろを指さす)あんた、どこへ行くんだい？(無言で前を指さす)いいこと悪いことって何が違うんだい。洋服がだいぶ臭いな。まあ健康だよ、歯だつて残ってるしね……。うんこだつて出るしね……。いつまで生きてりゃいいんだろ。生きてると死んでるは違うね。うん、生きてると死んでるはだいぶ違うね。俺は生きているほうがいいね。ひどく辛いこともないしね、ぼんやり辛いのは、まあしょうがないしね……。腹が減ったなあ。もつと盗まないと、もつと盗まないと、やっていけないよ。(去る)

【異邦人】

しるびお、けーな登場。

けーな　なんでこんな町に来ちゃったんだらう……。この町は特にひどい。ろくな野菜もない。その町ごとの野菜が一番の楽しみだったのに。野菜、食べた？

しるびお　（無言で首を振る）

けーな　私の記憶の中で、野菜だけが輝いている。甘い人参。蕪、とか、瓜。こんなところで死ぬのは嫌だな。西瓜畑の中がいいな。お金、貰えた？

しるびお　（頷く）

けーな　本当？

しるびお　（頷く。紙幣を渡す）

けーな　何か楽しいもの買わなきゃ。どうせ他の町じゃ使えないし。明日使えるかもわかんないし。年寄りばかり。だんだんみんな年寄りになっていくんだ。そういう病気なんだな。私の疲れた骨。よく眠れば、あんまり文句はないけど。旅って言っても、私は生活しているだけだし。こんな生活、私の夢だったかな。それとも、落ちぶれたのかな。誰か言ってくれればいいのに、「お前はもう駄目です」って。それならわかるのに。割りと信じるから。駄目かな？

しるびお　いや、わかんないよ。

けーな　あなたはまだ駄目じゃないよ。

しるびお　知ってるよ。

けーな　しるびお。あなたの名前を言ったの、今が初めてだけど、変わった名前だよね。

しるびお　自分でつけたんだよ。

けーな　あ、そうだったんだ。

しるびお　うん。

けーな　変わった名前だよね。

しるびお　自分でつけたんだよ。

けーな　しるびおは私の生まれ変わった弟なのかもしれない。私に弟なんていなかったけど。年もだいぶ違っけど。なんだかそんな気がする。

しるびお　カタツムリでも集めて食うか。（去る）

けーな　表と裏があって、あり得たかもしれない裏の世界があって、でもその裏っていうのは実はたくさんあって、普通は表と裏っていうと二次元的なイメージだけど、実はもっとたくさんの次元での表と裏があって、ぜんぜんイメージできないんだけどさ。そういうのがあって、そのぜんぜんイメージできないどこかの裏の世界からいは、幸せな私が暮らしていて欲しいな。それは贅沢なんだろうか。（去る）

るうじー、さいとう登場。るうじーは手に鏡を持っている。

るうじー さあ、必要な材料は集まった。そいつの似顔絵、そいつの触ったもの、そいつのいた場所、そいつの言った言葉。何だったっけ。

さいとう はっきり憶えてないんだよ。

るうじー いいんだよ。

さいとう 「で、」

るうじー 「どうだい？」……

さいとう いや、本当ははっきり憶えてないんだよ。

るうじー さあ、これに必要なものは集まりました。この画面に、そいつの過去の姿、現在の姿、そして未来の姿が映ります。よく見ていてください。「どうだい？」

さいとう やっぱり違うんだよ、何も映ってないよ。

るうじー、恐怖の表情を浮かべている。

さいとう どうしたんだよ。何も映ってないよ。

るうじー そんな！ こんなことが！

さいとう どうしたんだよ。

るうじー ああ！ 恐ろしい！

さいとう 何が恐ろしいんだよ。

るうじー あなたこれ見えないの！

さいとう 何のことだよ。

るうじー あなたこれ、見えないの！

さいとう 真っ暗じゃん。

るうじー ああ、恐ろしい！

さいとう 何なんだよ、これ。

るうじー やっぱりあれは悪い予感だったんだ。なんか雲の流れがおかしいと思ったんだ。あんたも思わなかった？ 今朝、なんだか様子が変だったんだ。あの方向から、あの方向から何か悪い予感がしていたんだ。ほら、心当たりがあるでしょ。あの、「死の方角」のこと！

さいとう ああ、ああああ、ああ、ああ。

るうしー あいつはあっちから来たんだ。何が起こるかわからないよ。もう人間のどこにかできる話じゃないんだ。

さいとう 何とかしないと。

るうしー 呪いっていうのは、何とかしようと思って何とかなるものじゃないんだ。じっと耐えるしかないんだよ。

さいとう、走って去る。

るうしー 恐ろしい、恐ろしい、恐ろしい、恐ろしい……。 (ゲームボーイめいた、占いの道具に耳を澄ます) 何か聞こえる。何？ 何？ えっ、何……？ (去る)

何か言っている声が聞こえる。はっきりとは聞き取れない。

【休憩】

休憩。

【老人たち】

老人A、老人B、老人C、老人D、まいと登場。

老人たちは外套を着ている。

老人A 色んな機械が壊れた。もう無理だな。

老人C 私のだったらあげるよ。

老人A 無理だよ。

老人C 元気を出しなさいよ。

老人A 時々は空も見れたんだよ。これでも。俺は色々やったよ。行けるところまで行ってみたり。誰とも会わずに過ごしたり。会話って大事だね。だんだん自分が、人間じゃないみたいになって。気が狂う前にやめてよかったよ。

老人B よかったねえ。

老人A ああ、よかった。よかったよ、本当に。

老人D 俺は怖いよ。

老人C 何が。

老人D そんな遠くに行くのは、俺は怖いよ……。

老人A 大丈夫だよ。

老人D 俺は行かないよ。

老人C 誰も行けなんて言っていないよ。

老人A 最初は怖いよ。でも怖くなるんだよ。でも怖くなるのが、本当は一番怖いんだよ。

老人D 怖いよ。

老人A 色んな見たことのない生き物がいたよ。生き物だと思っただけど。生きてるようには見えなかったな。でも生きてるんだと思うんだよ。あれは、何ていう色なんだろうな。言いようがないんだけど、食べそうにはなかったな。

老人B おいしいかもね、本当は。

老人A おいしいかもね。本当は。

老人D 食われるよ。いつまでも食う側だと思ってるって危ないよ。

老人A 危ないのは別にいいんだよ。体にいいんだよ危ないのは。

老人C 本当かなあ。

老人A でも昔の話だよ。

老人D 生きててよかったね。

老人A ああ、よかったよ、本当に。

老人C (お茶を差し出して) お茶だよ。

老人A ああ、ありがとう。

老人たち、しばらく黙ってお茶を飲む。

老人A でも、本当に危ないところまでは行ってないんだよ。呪われるっていうのは、多分、顔が全然変わっちゃうみたいなことだと思っただよ。昔、そういう夢をみたことがあるんだけど、鏡を見ると、見慣れない人がいるんだよ。でも自分なんだよ。でも自分ではわかんないんだよ。自分の顔なんて見れないからさ。たぶんそういうことなんだと思っただよ。だから俺は頭で考えて、こっから先は行けない、行ったら本当に駄目だと思っただよ。それで、帰ってきたんだよ。まず鏡を見たね。何ともなかったよ。

老人たち、しばらく黙ってお茶を飲む。

老人A 何ともなかったよ。

まいと (泣いている) なんか、よくわかんないんだけど、よくわかんないんだけどさ。話、聞けてよかったよ。本当によくわかんないんだけど、なんか、他人事じやない気がするんだよ。ありがとう。ありがとう。これ、さっきとってきたキノコなんだけど、みんなにあげるよ。ありがとう。本当にありがとう(老人たちにキノコを配って去る)。

老人A、老人B、もらったキノコを食べようとする。

老人C、老人D、それを力づくで止める。

老人B ええ？ おいしいやつだよ？

老人C、老人D、外套を脱ぐ。正体はそれぞれるうしー、さいとうだった。

るうしー おはあちゃん、ニュース読んでないでしょ。それ、最近突然変異して、毒キノコになったんだよ。死ぬよ？

さいとう 呪いだよ。やっぱり。怖えよ。

るうしー やっぱ無理なんだよ。私たちにはどうにもできないんだよ。この町はゆっくり滅びていくんだ。それはもうしょうがないんだよ。

さいとう 俺は嫌だよ。逃げたいよ。

るうしー そんなことしたら碌な死に方しないよ。呪いっていうのはそういうものなんだよ。

さいとう もう嫌だよ。

るうしー 帰ろう。

さいとう 俺は嫌だよ。

るうしー、さいとう去る。

【二回目の街頭劇】

老人A、老人B、それぞれしるびお、けーになる。

けーな (あたりを見回す) 誰もいない……。

まいと、泣きながら登場。

けーな 観ますか？

まいと (頷く)

沈黙劇。

(やかんの飛翔。及びけだるく海を眺めるさま。どことなく思い出される1970年代のシティポップ。また人類の退化。退化した人類はすべて眠りにつき、やかんは家に帰る。)

けーな 「やかん飛行」という作品でした。

まいと 俺は劇なんて、わかんないけど。わかんないけど、すごくよかったよ。なんていうか、なんていうんだかわかんないけど。昔のことを、思い出すような気がしたよ。いや、それは未来のことなのかもしれないけど。楽になったよ。何か気持ち、気持ち、ほかほかするよ。うん、すごくよかったよ。

けーな お金もらってもいいですか？

まいと あっ。しまった。お金なんて持ってないな。どうしよう。食べ物でもいいかな。今ちょうど、キノコならあるんだけど。

けーな キノコは嫌です。

まいと そうか。じゃあ、他に何かあるかな。あ、水なすがあるよ。これでいいかな。

まいと、けーなに水なすを渡す。けーなはそれを食べる。

まいと じゃあな。(去る)

けーな、水なすを飲み込む。

水なすが爆発する。

けーな (死にかけて) ああ……ああ……ああ…… (息も絶え絶えに歌う) しあんじょー、らびたらしゃーもあ、しちゅまーる、くちゅそあるあんどーもあ、ぶまんぼーて、しちゅめーまー、かーもあじゅー、むれーおしー、ぬざろん、ぶぬれてるにーて、だんるぶる、どとーとりもんしーて、だんるしえー、ぶる、どぶるぶれーま、もなむー、くるあちゅ、こんせーも※(死ぬ)

しるびお、けーなを担いで去る。

※Hymne à L'Amour (1950) Lyrics by Edith Piaf / Music by Marguerite Monnot

【声】

声 悲しいことはいつもすでに始まっていた。目に見えるときはもう遅い。これで何日目だろう？ きっと私たちは何度も失われる。失われる度に呪いは強くなる。誰が悪いんじゃない。みんながちょっとずつ悪いだけ。もうすぐ失われる、この街も。からっぽのショッピングモールも、誰もいない映画館も、通っていた小学校も、中華料理屋さんも、薄暗い地下道も、もうすぐ失われてしまう。何度も何度も。私は希望が持てない。私の想像力が届く未来には希望は持てない。私の貧弱な想像力。せめて私の思いつかないようなところで、あらゆるものが救われて欲しい。遠い遠い未来に。私の何度も死んだ未来に。誰かが現れて。小さな誰かが。誰も気づかない誰かが。

【弟】

さいとう、るうしー、しるびお登場。

るうしーはゲームボーイを思い出す占いの道具と、死んだフラミンゴを持っている。

るうしー 最近はずきり聞こえるのよ、この声。わかんないけど、終わりが近い感じがするよね。

しるびお さっきまた一人死んだよ。

るうしー 桶屋が儲かるねえ。何で死んだの？

しるびお (爆発のジェスチャー)

るうしー またかい。

さいとう 俺は、真面目に仕事をしただけだよ。ちょっと真面目すぎたとは思ってるけど。

るうしー 知ってるよ。

さいとう もうちょっと、色々勉強すればよかったな。人間のことか。人間なんて、興味なかったからな。

るうしー 知ってるよ。

さいとう 俺は俺を信じていたし、それでいいと思ってただけど、どうも俺っていうのは、俺だけじゃないみたいなんだな。人が死ぬっていうのは、ちょっと理解ができなかったんだけど、俺の中でも誰かが死んだりするな。(るうしーの方を見て) その声なんだけど、なんだか不思議でさ、見たことがないものや、知らないことが、わかるような気がするんだよ。俺の食べたことのない料理や、行ったことのない建物のことを、思い出す気がするんだよ。俺は何かできるのになって思ってる。なんだか寂しいんだよ。誰かがね、誰かがいた気がするんだよ。俺には兄弟なんていないけど。でも誰かがいるような気がするんだよ。これも呪いかな？ 呪いなのかもしれない。俺はどうなるんだろう？ たくさんの人がいたんだよ。きっと。たくさんの人がいたんだ。考えたことなかったけど。何で今まで、考えたことがなかったんだろう。

るうしー あんた、誰？

間。

さいとう 俺はやめたんだよ、だいぶ昔に。逃げているのが合ってたんだよ。でもそうしているのがよかったんだ

よ。

るうじー (死んだフラミンゴでさいとうを殴る。さいとう、倒れる) あんたは悪くないよ。

さいとう うん。

るうじー 世界は暴力だから。

さいとう そうだよな。

るうじー 暴力には屈するしかないから。

さいとう 何回も何回も何回も何回もこんなことは繰り返してきた。気が遠くなるような長い間。

るうじー あんた本当に誰なの。

さいとう もうちょっとで何かがわかりそうな気がするんだよ、あの声さ、また聞こえないかな。

まいと登場。

まいと あのさあ。その声、どこにいても聞こえるよな。なんだか耳に痛くてさ。初めてじゃないと思うんだよ、聞いたのは。うん。憶えてるんだよ。俺、憶えてるんだよ、ここに来る前のこと。あそこに、あそこには、いろいろあったよ。いろいろあったような気がする。空っぽの建物がさ。それでも人が生きていたよ。生きていたんだと思う。たくさん電波が飛んでいたよ。映画をやっていたよ。映画っていうのがあってさ。どこでもうるさくって、でも静かだったよ。でも、本当にあれが、本当のことだったのか、いまいちよくわかんないんだよ。俺、行ってみようと思うんだ、あの場所に。まだあるのかわかんないんだけど、本当にあるのかわかんないんだけど、行くよ。こんなところにいたって、碌な食べ物もないし。腹減ってるんだよ、俺。じゃあな。

さいとう 俺も行くよ。

まいと、少し考え、走り去る。

さいとう あっ、待て！

さいとう、走って追っ。

るうじー あれ？ (フラミンゴが動く) 動いた？ ……動いた！ 動いた！

るうじー、しるびお去る。

【終章】

まいと、走って登場。

舞台上を走り続ける。

何度も倒れるが、何度も立ち上がる。

何度めかに倒れたとき、しばらく動かなくなる。

まいと 腹減ったなあ……。

まいと、また立ち上がり、走りだす。

しばらく走るが、また倒れる。今度はもう動かなくなる。

さいとう、走って登場。

まいとの死体を見つける。

さいとう、まいとの死体を担ぎ、背後の台座に据える。

それをしばらく眺めるさいとう。

神聖な音楽。

しるびお、るうしー、けーな登場。

まいとの死体が輝く。

永遠に輝く。

〈幕〉